



ニュースリリース

2013年6月19日付

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013

YAMAGATA International Documentary Film Festival 2013

10月10日 [木] ~ 17日 [木]

インターナショナル・コンペティション15作品決定 !!

“アジア初の国際ドキュメンタリー映画祭”として、1989年から隔年で開催されてきた本映画祭も今年で13回目を迎えることになりました。これまでの、皆さまの様々なお力添えに厚くお礼申し上げます。

映画祭の仕事の核は、映画の場を作り、成立させること、多様な映画をより多くの方々と共有することです。私たちはこれまで準備してきた企画内容にさらに磨きをかけ、大詰めの準備に邁進してゆきたいと思います。

皆さまの“交流の場”になることを願いつつ、本映画祭を多くの人に知っていただき、ご参加いただけますよう、ご紹介ご検討ください。何卒、よろしくお願い申し上げます。

今回のお知らせは？

- ① 映画祭の開催概要が固まりました。
- ② 世界中から応募された映画の中からインターナショナル・コンペティションのラインアップが決まりました。
- ③ プレイベントの開催が決定しました。
- ④ 映画祭ボランティアの募集が開始されました。

※資料内容は最新ではないものもございますので、記事掲載の場合は必ず広報へ確認をお願いします。

※写真掲載の場合は、事前に必ず事務局へご一報ください。

〈お問い合わせ〉

■ 山形国際ドキュメンタリー映画祭 東京事務局

広報担当：梶谷有里、酒井慧

〒160-0005 東京都新宿区愛住町22 第3山田ビル6F

phone : 03-5362-0672 fax : 03-5362-0670

e-mail : mail@tokyo.yidff.jp

■ 山形国際ドキュメンタリー映画祭 山形事務局

〒990-0044 山形市木の実町9-52 木の実マンション201

phone : 023-666-4480 fax : 023-625-4550

e-mail : info@yidff.jp

公式サイト www.yidff.jp

★ YIDFF ニュース配信サービス

最新の映画祭情報を電子メールにて無料でお届けするものです。配信は1ヶ月に1~2回の予定ですが、臨時号も出ます。ニュースは英語と日本語。公式サイト内からご登録いただけます。

★ YIDFF 公式Twitter アカウント

@yidff_8989

開催に向けた鮮度の高い情報や上映会情報、もちろん事務局の日常などもツイートしています。

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013 開催概要決定！

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013の開催概要が決定いたしましたので、ここに発表いたします。

名称：山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013

会期：10月10日 [木] ~17日 [木] 8日間

会場：山形市中央公民館（アズ七日町）、山形市民会館、フォーラム山形、山形美術館ほか

●インターナショナル・コンペティション

応募作品から15作品を上映（別紙の通り）

映画祭期間中、国際審査員によって以下の賞が選ばれます。

大賞 ロバート&フランシス・フラハティ賞（賞金200万円）

最優秀賞 山形市長賞（賞金100万円）

優秀賞（賞金30万円）

特別賞（賞金30万円）

●アジア千波万波（7月に作品決定）

荒削りでもひと際光るものを感じさせるアジアの新進作家を発掘、応援するプログラム。

応募作品から20作品程度を上映します。

映画祭期間中、国際審査員によって以下の賞が選ばれます。

また日本映画監督協会賞の審査対象作品です。

小川紳介賞（賞金50万円）

優秀賞（賞金30万円）

●日本パノラマ（仮）

日本のドキュメンタリー作品の様々な試みを世界へ向けて紹介するプログラム。

日本映画監督協会賞の審査対象作品です。

【注目の特集プログラム！】（7月末上映作品等、詳細決定予定）

●未来の記憶のためにークリス・マルケルの旅と闘い

Memories of the Future: Chris Marker's Trials and Travels

映画監督として幾多の傑作を送り出したクリス・マルケル（フランス、1921-2012）は、また写真、テキストからインターネット上の仮想空間まで、あらゆるメディアを使いこなし制作をつづけた先駆的アーティストである。その広大な作品世界を体験する渾身のプログラム。

（コーディネーター：港千尋、小野聖子）

●6つの眼差しと《倫理マシーン》

The Ethics Machine: Six Gazes of the Camera

ドキュメンタリー作家は現実を相手に、「ある世界」ではない「この世界」を描く。どのカメラアングル、光の具合、ショットの切れ目を判断するにも、倫理的な課題が立ちはだかっている。カメラは倫理を担う装置となる。本プログラムでは秀作の上映と活発なディスカッションを通して問題提起とする。東日本大震災の映像記録を巡るシンポジウムなども予定する。

（コーディネーター：阿部マーク・ノーネス、藤岡朝子）

●それぞれの「アラブの春」

Another Side of the “Arab Spring”

2011年、チュニジアで長期独裁政権を崩壊させ、周辺アラブ諸国に広がったいわゆる「アラブの春」。かつてない規模の反政府抗議活動とその余波をさまざまな視点で表現した作品を上映する。

●ともにある Cinema with Us

Cinema with Us

2011年3月11日。東日本大震災、原発事故という未曾有の体験とそこから生まれ続ける課題を、改めて見つめ伝えていくプログラム。映画に何が出来るのかを問い、前回映画祭からスタートしたプロジェクトを継続する。

●やまがたと映画

Film about Yamagata

現代史を映し続けたヤマガタを、ドキュメンタリーによって再発見する。発掘映像による多角的な山形探検。ミラノ大学、中国美術学院、東北芸術工科大学の学生の作品交流などを通して、若い世代による映像の未来を映し出す取り組みを行う。

●審査員作品・特別招待作品

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013 インターナショナル・コンペティション15作品ラインアップ決定 !!

2年に一度の山形国際ドキュメンタリー映画祭の年がやってきました。“アジア初の国際ドキュメンタリー映画祭”として、1989年から隔年で開催されてきた本映画祭も今年で13回目を迎えます。

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013 インターナショナル・コンペティション部門作品募集として2012年9月1日より2013年4月10日（消印有効）の期間で受け付けた作品から、10名の選考委員による厳正な選考を行い、15作品を上映作品（別紙リスト参照）として決定いたしました。

- 応募総数 117の国と地域から1,152本（前回比106.8%）
（アジア千波万波部門【現在選考中】は64の国と地域から609本）
2つの公募部門を合わせると、123の国と地域から1,761本
（前回比98.8%）

- 比較 前回（YIDFF 2011 インターナショナル・コンペティション）は101の国と地域から1,078本

- 応募傾向 撮影フォーマットは前回同様、圧倒的にビデオ撮影が多く、HD画質のものが増えてきています。
応募国・地域

1位	ドイツ	139本（前回149本）
2位	日本	113本（前回81本）
2位	アメリカ	113本（前回110本）
4位	フランス	105本（前回124本）

今回応募・制作国としての初参加国は、エリトリア、コンゴ共和国、シエラレオネ、トンガ、マーシャル諸島の5ヶ国（地域）です。
また日本、イスラエル、カナダ、メキシコ、ポーランドからの応募数が増えています。東日本大震災を題材とした作品は海外からも応募がありました。

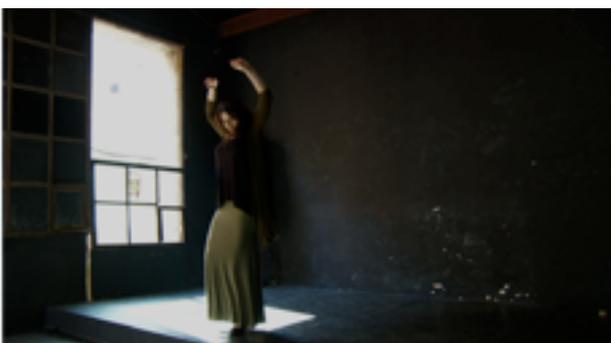
【インターナショナル・コンペティション 決定作品】



① 殺人という行為 The Act of Killing

デンマーク・インドネシア・ノルウェー・イギリス/2012/インドネシア語/カラー/159分
監督：ジョシュア・オッペンハイマー Joshua Oppenheimer

自らの行いを全く悔やむことのない殺人部隊のリーダーに出会った映画作家が、彼らに、大量殺人における彼らの役割を再演し、実際に行われた殺人行為を映画化しようとする。その悪夢的な製作のプロセスにおいて浮かび上がるのは、映画的な熱狂の夢であり、大量殺人者の持つ「想像性」への心乱される旅であり、彼らの住む世界の、衝撃的なほど陳腐で、腐敗と免責がはびこる支配体制である。強烈な映像世界と、人間社会そのものの弱さ、罪深さに圧倒される159分。



② ジプシー・バルセロナ Bajari: Gypsy Barcelona

スペイン/2012/スペイン語/カラー/84分
監督：エヴァ・ヴィラ Eva Vila

フラメンコの才能は、血統を通して独占的に受け継がれると信じられている。とりわけバルセロナのジプシー社会では、フラメンコは学校や本で学ぶものではなく、家庭内やバーで伝えられ、街角で完成するものである。伝説的ダンサーを叔母にもち、超絶技巧の足さばきで見る者の目を釘付けにするカリメ・アマヤと、ピカピカのフラメンコ・ブーツを履いて舞台に立つことを夢見、ステップを磨く小さなダンサー、ファニート。結束の固いジプシー社会、フラメンコという芸術継承に対する彼らの真摯な努力が、バルセロナの町の熱い空気とともに観客を魅了する。



③ 空低く 大地高し Boundary

タイ・カンボジア・フランス/2013/タイ語・クメール語/カラー/96分
監督：ノントワット・ナムベンジャポン Nontawat Nubenchapol

2010年、タイの映像作家ノントワットは、カンボジアとの国境に接するシーサケート県出身の24歳の若者と出会う。タイ南部で兵士をしていたが除隊し、故郷に帰ろうとしている彼の経験を糸口に、「タクシン派（農村中心の赤シャツ派）」「反タクシン派（都市の黄シャツ派）」が対立するタイ国内の政治闘争、カンボジアとの間の国境紛争、国境沿いの人々の暮らしを、独特の映像感覚によって点描する。

④ Char... The No-man's Island

(NHKドキュメンタリー「チャロ! 立ち入り禁止島に住む」)

日本・インド・イタリア・ノルウェー・デンマーク/2012/ベンガル語・ヒンディー語/カラー/88分
監督：ソーラヴ・サーランギ Sourav Sarangi

インドとバングラデシュの国境に流れる大河ガンジスに浮かぶ中洲の島々。大きく蛇行する河は、サイクロン来襲のたびに流れが大きく変わり、中洲は削られときに消滅する。不毛の地だが古来、住む人がいて両岸を行き来し交易を営む。だがそこは「国境」であり「立ち入り禁止地帯」で、人々は自国に渡るにも検問を通らねばならない。近年、ダムの影響もあり雨季の河の流れの変化が激しくなり、中洲も次々に消滅していく。本作では「ダム」「国境」という近代インドの2つの影に追い立てられながら暮らす人々の厳しい現実に向かい迫る。YIDFF2009アジア千波万波部門で奨励賞、コミュニティシネマ賞をダブル受賞した『ピラルの世界』のソーラヴ・サーランギ監督作品。NHKとの国際共同制作。



⑤ 天からの贈り物 小林村の悲劇

A Gift from the Sky - The Tragedy of Hsiaolin Village, Part 2

台湾/2013/台湾語・中国語/カラー/153分

監督：羅興階 (ルオ・シンジエ) Lo Hsin-chieh
王秀齡 (ワン・シウリン) Wang Hsiu-ling

2009年8月8日の台風と大規模な土砂崩れによって、全村壊滅状態となり犠牲者が多数出た台湾の小林村。2年以上の間、生き残った村人たちはずっと、なぜこのような事態になってしまったのかを考え続けている。ある人々は巫女を通して死人と再会を果たそうとし、またある夫婦は宿そうとしている子どもたちに希望を見、他の幾人かはいまだに家族を失った痛みから逃れることができない。村人たちの終わりのない苦難、なんとか生活を立て直そうとする不屈の精神を丹念に記録した、心に迫る労作。YIDFF'99アジア千波万波『労使間の滑稽な競争』の羅興階監督と、パートナーである王秀齡監督による共同作品。本作は、前回YIDFF2011「回到一圈：日台ドキュメンタリーの12年後」で上映した『父の日の贈り物 小林村の悲劇その1』の続編。



⑥ 祖国か死か Motherland or Death

ロシア/2011/スペイン語/カラー/99分

監督：ヴィタリー・マンスキー Vitaly Mansky

キューバと聞いて、何を想像するだろう？ イメージと現実の相違がこの国ほど大きな国はないのではないだろうか。この国は50年以上もの間、革命のスローガン「祖国か死か！」に縛られている。革命の前に生まれ、いま人生の終盤にさしかかっている人々、「祖国」がまさに「死」と等しくある人々の暮らしについての、叙情あふれる断章。YIDFF2001 コンペ『青春クロニクル』、YIDFF2007 コンペ『ワイルド・ワイルド・ビーチ』のヴィタリー・マンスキー監督作品。



⑦ 庭園に入れば Once I Entered a Garden

フランス・イスラエル・スイス/2012/ヘブライ語・アラビア語/カラー/97分

監督：アヴィ・モグラビ Avi Mograbi

かつての中東。そこでのコミュニティは、民族や宗教などという区分では分断されておらず、隠喩的な意味での「境界」さえ存在しなかった。イスラエル生まれの映像作家アヴィと、彼の長年の友人でありアラビア語の先生であるパレスティナ人アリとが、一緒に旅をする。互いを、互いの属する共同体の歴史へと連れ出す旅だ。彼らが幸せに共存できた場所が、この二人の旅を通していま再び、気負いなく現れる。YIDFF'99 コンペで優秀賞に輝いた『ハッピー・バースデー、Mr.モグラビ』、YIDFF2009 コンペ『Z32』のアヴィ・モグラビ監督作品。



⑧ サンティアゴの扉 The Other Day

チリ/2012/スペイン語/カラー/122分

監督：イグナシオ・アグエーロ Ignacio Agüero

チリ、サンティアゴのとある家。陰影にあふれた美しい映像を通して、ある家族の記憶へと深く導かれていく。が、たびたび訪問客が玄関の呼び鈴を鳴らし、遮られる。家の主である映画作家はその訪問客たちに興味をもち、彼らの日常へも入り込んでいく。サンティアゴの家々、路地の姿、そこで生き、働く人々との対話から、家族史とチリ現代史が詩情豊かに交錯する。第1回YIDFF'89 コンペ『100人の子供たちが列車を待っている』、YIDFF'93 コンペ『氷の夢』のイグナシオ・アグエーロ監督作品。



⑨ 家族のかけら Parts of a Family

オランダ・メキシコ/2012/スペイン語/カラー/83分

監督：ディエゴ・グティエレス Diego Gutiérrez

老夫婦ゴンツァーロとジーナは、メキシコシティ郊外の4,000平方メートルの敷地に建つ壮麗な邸宅に暮らしている。有刺鉄線つきの壁が、外界をはるか遠いものにしてている。彼らの物語を語るのは、彼らの息子ディエゴ・グティエレス。本作は、大きな愛に包まれていたはずの二人の夫婦の関係が、年月をともに過ごしたのち、窒息しそうな牢獄へとどう変わったのかについての、ほろ苦く普遍的な愛の物語である。



⑩ パンク・シンドローム The Punk Syndrome

フィンランド・ノルウェー・スウェーデン/2012/フィンランド語/カラー/85分

監督：ユッカ・カルッカインン Jukka Kärkkäinen

J-P・パッシ J-P Passi

フィンランドの、知的障がいをもったトニ、サミ、ペルティ、カリの4人で構成されたパワフルなパンクロックバンド。パンクに魅了された彼らの音楽は、自由への欲求、社会への怒りをシンプルかつ力強く表現し、多くのパンクファンに愛されている。本作は彼らの日常に寄り添い、バンドの練習、リハーサル、ライブの成功、楽曲発売に至るまでを中心に記録。4人それぞれの際立った個性と魅力、彼らの間に生まれる感情の揺れ動きを、軽やかに描き出す。



⑪ リヴィジョン〜検証 Revision

ドイツ/2012/ドイツ語、ルーマニア語、ロマニー語/カラー/106分

監督：フィリップ・シェフナー Philip Scheffner

1992年、ドイツとポーランド国境のとうもろこし畑で、ルーマニアからやってきた二人の不法移民が射殺される。監督フィリップ・シェフナーは、この事件にまつわる風景と記憶、目撃者の証言、資料、独自の調査結果をパズルのように組み合わせ、一つの「映画的検証」として作品を形作っていく。ドイツ当局によって「ハンターによる誤射事件」として片付けられた二人のロマ人男性の死の背景にある、東欧移民、とりわけジプシーの人々への人種差別と暴力の歴史が次第に浮かび上がってくる。



⑫ 物語る私たち Stories We Tell

カナダ/2012/英語/カラー/108分

監督：サラ・ポーリー Sarah Polley

アトム・エゴヤン監督作品などで有名な女優であり、アカデミー賞にもノミネートされた経験を持つサラ・ポーリー監督が、自身の家族、特に母親の生き方、そして自分の出自における隠された真実を探っていく。ドキュメンタリーとフィクションというジャンルの境界を軽々と飛びこえる、創意に溢れた個人史的映画。表現者一家という特異な環境の中に潜む、捉えどころのない真実の暴露に挑み、深く複雑な愛情に満ちた、ある家族の姿を描き出す。



⑬ 蜘蛛の地 Tour of Duty

韓国/2013/韓国語/カラー/161分

監督：キム・ドンリョン Kim Dong-ryung

パク・ギョンテ Park Kyoung-tae

近いうちに取り壊されるであろう韓国・京畿地方北部にある米軍キャンプ近くの旧歓楽街には、今、沈黙しか残されていない。その町には、いまだ3人の元売春婦の女性が、それぞれの体と心に刻まれた傷、記憶、幻想に悩まされながらひっそりと生きている。今は廃墟となった跡地をさまよう彼女たちの姿と記憶の断片が、入念に作り込まれた忘れがたい映像とともに、置き去りにされた哀切極まりない真実を暴露する。YIDFF2009アジア千波万波で小川紳介賞を受賞した『アメリカ通り』のキム・ドンリョン監督とパク・ギョンテ監督による共同作品。



⑭ なみのこえ (YIDFF特別版) Voices from the Waves

日本/2013/日本語/カラー/213分

監督：酒井 耕 Sakai Ko

濱口 竜介 Hamaguchi Ryusuke

本作は、東日本大震災における津波被災者へのインタビュー映画『なみのおと』（YIDFF2011「ともにあるCinema with Us」にて上映）の続編。活動の場所を福島県相馬郡新地町および宮城県気仙沼市に絞り、1年以上にわたり撮影を続行。2011年3月11日の記憶がこれらの街に暮らす人々の口から語られる。彼らは、夫婦、親子、親友、職場仲間との会話の中で、あの日の記憶を呼び戻していく。通常の「被災者」のイメージを大きく飛び越える、彼らひとりひとりの「こえ」の記録である。



⑮ 我々のものではない世界 A World Not Ours

パレスティナ・アラブ首長国連邦・イギリス/2012/アラビア語・英語/カラー・モノクロ/93分

監督：マフディ・フレイフェル Mahdi Fleifel

レバノン南部のパレスティナ難民キャンプ、アイン・ヘルワで育ち、現在はデンマークで生活している映像作家。アイン・ヘルワを故郷として愛する彼が毎年里帰りして撮りためた映像に、父の遺したホームビデオなどを織り交ぜ構成された本作には、ある家族の物語と、この数十年のパレスティナの歴史、キャンプ内部の変容が映し出される。仮住まいだったはずの「難民キャンプ」に長年暮らし続けざるをえない人々の現実に、当事者でもなく完全な外部者でもない監督が迫る。タイトルは、72年に暗殺されたパレスティナ人作家ガッサン・カナファーニーの小説のタイトルに基づく。

●国際ナショナル・コンペティション15作品の特徴

〈概観〉

<1>アジア圏の作家の成長・躍進

◆今年の映画祭は、国際ナショナル・コンペティションにアジアの作家の作品が多数並ぶこととなった。また同時に、過去に本映画祭で上映された作家たちも新たな成熟を見せ、再び山形の地を踏むことになった。これは、本映画祭が誕生してからおよそ四半世紀の間、アジア圏を中心に作家の活動を長期的かつ多角的に支援し続けてきた結果であり、本映画祭の継続の成果、その一端を垣間見ることができるのではないだろうか。

- ・コンペ15作品中、**6作品**がアジア作家によるもの。
(日本、台湾、韓国、タイ、インド、パレスティナ)
- ・特に韓国作品の国際ナショナル・コンペティションでの上映は初。加えて監督のキム・ドンリョン氏は、YIDFF 2009 アジア千波万波にて小川紳介賞を受賞した作家である。アジアの作家の登竜門的な部門であるアジア千波万波で最高賞を取った監督が、国際ナショナル・コンペティションに応募、上映作品に選ばれるという、映画祭としても嬉しい結果となった。
- ・過去の映画祭で上映したことのある監督たちが、再び優れた新作を携えて再登場。
→ヴィタリー・マンスキー監督、アヴィ・モグラビ監督、イグナシオ・アグエーロ監督（以上過去にコンペ上映経験あり）、ソーラヴ・サーランギ監督、キム・ドンリョン監督、ルオ・シンジェ&ワン・シウリン監督（以上過去にアジア千波万波上映経験あり）。

<2>再び人と社会に真摯に向き合う時代に

◆昨今、映画・映像の世界では急速な技術革新が進行している。4K、8Kという超高解像画質、新型小型カメラやマイク、ポストプロダクションにおける映像と音の作り込みなどが広く見られる中、今年のラインアップでは、そうした最新技術や実験性よりも、人間を朴訥とも言える姿勢で正視している作品が並んだ。先進的な技術に頼ることなく、人と社会に対して再び真摯に向き合う時代が来ていることを予感させる。

〈共通するテーマ〉

(1) 逆境に耐え、必死に〈いま〉を生きる人々と、〈土地・故郷〉という磁場

- ・いまだ紛争や暴力、貧困、災害などの困難に満ちた2010年代の世界。今年の15作品には、そうした逆境、苦難のなかで必死に生を営む人々の姿を切り取った作品が多く選出された。とりわけ、人の移動がより活発化している現代の複雑な世界に生きる人々の生に、時を超えて〈土地・故郷〉というものが与える影響は深く大きい。その土地・場所から出たくても出られない、閉塞感の中で生きる人々、あるいは逆に、災害や貧困などで離散を余儀なくされた人々の故郷への思いや記憶。今回の15本には、とりわけこの〈土地・故郷〉から切り離すことのできない人生、記憶」というモチーフが多く見られた。

(2) 家族／人間関係を見つめ直す

- ・例年以上に自らの家族をモチーフにした作品が多く寄せられたが、コンペでは、夫婦関係や、親子関係、家族のルーツを見つめ考え直す、といった作品が特に共感を呼んだ。例えば日本の作品『なみのこえ YIDFF特別版』は、震災についての対話というだけでなく、家族や友人、同僚といった人間関係のあり方の固有性を、その対話自体によって改めて見つめ直すという、より普遍的な問いへと作品テーマを広げている。

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013 プレイベントについて

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013 プレイベント

『～山形映画祭の生みの親～ 映画作家 小川紳介 山形を獲る』開催!!

特定非営利活動法人山形国際ドキュメンタリー映画祭は、今年開催の映画祭2013のプレイベントとして『映画作家 小川紳介 山形を獲る』と題した上映会を、2013年7月27日 [土] 28日 [日]の日程で遊学館ホールにて開催します。

なぜ山形でドキュメンタリー映画祭が行われることになったのか？ 上山市牧野にプロダクションごと移り住み、自給自足の生活を続けながら映画を撮り続けた小川紳介監督。山形国際ドキュメンタリー映画祭の立ち上げに尽力した小川監督の想いは、今も脈々と映画祭に息づいています。この山形にて地元の人々と一緒に作り上げた数々の作品は国内外で高い評価を受け、ベルリン国際映画祭にて国際批評家連盟賞を受賞した名作もこの山形の地から生まれました。そうした一連の山形にて作られた名作の数々を一挙に上映し、今もなお、世界の映画作家を鼓舞しつづける小川監督の映画にかける魂の軌跡を振り返ります。作品上映に加えて、小川プロを山形に呼び込んだ農民詩人・木村迪夫さんと元小川プロの映画監督・飯塚俊男さんによる特別対談も行います。

● 「～山形映画祭の生みの親～ 映画作家 小川紳介 山形を獲る」

・ 日程：7月27日 [土]、7月28日 [日]

・ 会場：遊学館ホール

・ 上映作品

『クリーンセンター訪問記』

『牧野物語・養蚕編』

『牧野物語・峠』

『ニッポン国古屋敷村』

『1000年刻みの日時計 牧野村物語』

『HARE TO KE 小川プロダクションとの出会い』（参考上映）

特別対談：小川プロダクションとの日々 木村迪夫さん×飯塚俊男さん

・ スケジュール

● 7月27日 [土]

10:00- 『クリーンセンター訪問記』 『牧野物語・峠』（作品間10分休憩）

15:10- 『ニッポン国古屋敷村』（途中10分休憩）

● 7月28日 [日]

10:00- 『牧野物語・養蚕編』

13:00- 『HARE TO KE 小川プロダクションとの出会い』

14:30- 特別対談：小川プロダクションとの日々 農民詩人・木村迪夫さんと元小川プロの映画監督・飯塚俊男さん

15:50- 『1000年刻みの日時計 牧野村物語』（途中10分休憩）

・ 入場料金：前売1回券800円（当日1,000円）、前売3回券2,000円（当日2,800円）
通し券2,900円（当日券はありません）

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2013 ボランティア大募集!

特定非営利活動法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭は、映画祭期間中にお手伝いいただけるボランティアの方々を募集しております。各方面から絶賛されてきたボランティアの皆さんによる手作り感と、ゲストの方、お客様をお迎えするおもてなしの心。市民がつくる映画祭という姿が明確に現れるのが、このボランティアの皆さんの活躍です。

2011年の映画祭では、山形県内をはじめ全国から353名の方々がさまざまな場所で活躍してくれました。

今年も多くの方々に手伝いいただけるよう、ボランティア説明会を設けることとなりました。

●主な活動

- ・ **会場運営**：映画祭の運営の最前線。映画祭のイメージはここで決まります。
- ・ **語学サポーター**：海外ゲストのアテンド、山形滞在中のおもてなし。
- ・ **広報**：映画祭の開催を多くの方に広める活動です。ポスター掲示、テレビ・ラジオ出演など。
- ・ **司会進行**：上映後の質疑応答などの進行です。
- ・ **「デイリー・ニュース」取材・編集**：期間中毎日発行する新聞の記者です。
- ・ **市民賞運営**：市民投票の運営です。
- ・ **香味庵クラブ**：参加者と市民との交流の場の運営です。
- ・ **音声同時通訳機操作**：上映時の同時通訳機器の操作が主です。
- ・ **レセプション**：ウェルカム、さよならパーティーなどの企画運営です。（兼務可能）

※今回、「広報」セクションを新たに設けました。

以下の日程でボランティア説明会を開催します。

山形：7月10日【水】 15:00～、19:00～（2回）

7月20日【土】 15:00～、19:00～（2回）

8月6日【火】 15:00～、19:00～（2回）

※どの回も内容は同じです。

会場 山形市市民活動支援センター高度情報会議室（山形駅西口 霞城セントラル23F）

東京：7月23日【火】

会場 東北芸術工科大学外苑キャンパス